体育授業における中学生の学習意欲に関する検討

山本　幸輝　（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　南島　永衣子

キーワード：学習意欲，相互作用

Ⅰ．緒言

高橋ら（1989）によると，体育授業における教師の中心的な行動は大きく,「直接的指導」「マネジメント」「観察」「相互作用」の４つに区分される. 中でも教師の相互作用行動（以下，相互作用と略す）が，体育授業の雰囲気を決定付け, 授業成果に大きく影響すると言われている.

さて，熊谷（2004）によると，中学生の学習意欲の低い生徒は, 学習意欲の高い生徒よりも，肯定的な言葉かけに対して，ポジティブに受け止めることが出来ないことが明らかとされた.

そこで本研究では, 単元前後の学習意欲の変容に着目した. 中学生の体育授業における学習意欲の変容について検討することを目的とした.

Ⅱ．研究方法

調査対象は，甲賀市立 M 中学校 2 年生の女子 137 名とした.

調査時期は，2013 年 10 月から 11 月にかけての全 13 時間の器械運動の体育授業とした.

調査方法は，西田（1987）によって作成された「体育における学習意欲検査（Achievement Motivation in Physical Education Test)」（以下，AMPET と略す）を参考に，中学生用のアンケートに修正し，単元前後で学習意欲を測定した．なお，アンケートの修正は中学校教諭と協議を重ねたうえで実施した.

データの分析方法は，IBM 19.0 Statistics spss を用いて，対応のある t 検定を実施した.

Ⅲ．結果と考察

表 1 は単元前後の体育授業における学習意欲の平均値と標準偏差を示している．t 検定を行った結果，単元前後の平均値低下し，標準偏差は，少しばらつきが大きくなった．t 検定によると t 値において.204 と 5%あるいは 10%水準を満たしておらず統計的に有意な差は見られなかった.

教師の授業中の相互作用は，生徒に対し「いいよ」「OK」「ナイス」といった抽象的で今の運動のどこが良かったのかがわかりにくい相互作用が多かった．そのため，生徒は肯定的な相互作用を前向きに受け取ることができず, 学習意欲に有意な差が見られなかったのだと考えられる.

表1 体育授業における学習意欲の平均値と標準偏差

		M	SD	t値
学習意欲	前	79.88	3.722	0.204
	後	79.79	4.263	

P<0.05* P<0.01** P<0.001***

Ⅳ．まとめ

小学生の体育授業では, 相互作用の頻度が授業成果に大きな影響を与えることがわかっている．しかし，今回の研究では，教師の相互作用の頻度よりもその内容が重要であるということが推察される. 教師の相互作用の記録をとること. 毎時間終了後に形成的授業評価を行い, 授業の中で教師からの言葉かけがあったか, また, その言葉かけが有効であったかを調査することが挙げられる.

【主要参考・引用文献】

高橋健夫・岡澤祥訓ほか（1989）教師の相互作用行動が児童の学習行動及び学習成果に及ぼす影響について. 体育学研究（34）: 191-200.